

名家
演藝
ひかへ帳



熊谷爲蝶編

熊谷爲蝶編

鍋木清方畫

名家
演藝ひかへ帳

東京 東雲堂發行

はしがき

世の名人大家と云はるゝ藝術家が、平素自家の技藝に對して如何な苦心研究をして居らるゝか、所謂専門家としての努力發展に就いて修養の徑路、時代の傾向に伴ふ藝術美の調和、如何なる抱負態度を以て將來の藝壇に腐心せらるるかを、親しく各名家の談話に得たる記録に依りて、尠くとも藝術家の人格品性趣味の那邊に存するか、其心掛けが門外漢と如何に違ふかといふ趣味の問題内容を御紹介すること、徒に現代の殺風景沒趣味なる社會に嫌たらぬ反

動どうとして、不ふ必要ひつようではないと思おもふ。人間にんげんは單たんに實利主じつりしゅ義ぎに囚とらはれて居をるばかりが能のうてはない、生存せいぞんに於おける餘裕よゆうを味あじふといふ約束やくそくは結構けつこうな要求えうぎうで、疲勞疲労に墮たいして休養きゅうやう安息あんそく苦悶くもんに於おける慰藉ゐしや解脫げだつの道みちを得うべく。藝術げいじゆつの趣味しゆみを會得えとくするのは強ふち不健全ふけんぜんなどと稱しょうすべきものでないと思おもふ。のみならず、併あせて藝術げいじゆつに對たいする敬意けいぎを表あらわしたい老婆心らうはしんから、此書このしよを編へんする動機どうきとなつた。聊いさか蛇足へきそくを添そへてこれを序じよとする。

青簾皆お揃ひの一座かな

庚戌初夏

爲

蝶

名家演藝ひかへ帳目次

新脚本を演ずる覺悟と踊の譜……………	(市川高麗藏)……………(一)
晝夜の給金僅に廿錢て女優一座組織したる當時(市川九女八)……………	(三)
踊の稽古と花柳派の發展……………	(花柳輔次郎)……………(三七)
女義太夫の發展策としての研究所問題……………	(豐竹呂昇)……………(五〇)
浪花節の改良と私の希望……………	(桃中軒雲右衛門)……………(五五)
故團平の手紙を見て如何に自分の非を悟つたか……………	(豐澤團平)……………(七三)
和洋樂の調和と一中節の譜……………	(大槻如電)……………(八五)
演劇に於ける手拭の活用……………	(尾上梅幸)……………(四九)
新派劇の抱負と劇評家に對する希望……………	(川上音二郎)……………(一〇三)
鶴龜と一休禪師の作曲……………	(吉住小三郎)……………(二六)
踊、所作事、狂言、淫瑠璃と振附の無學……………	(幸堂得知)……………(三九)

九代目市川團十郎の勸進帳の呼吸……………	(杵屋六左衛門)……………	(一四〇)
操三番叟の型と三味線と鳴物……………	(杵屋勘五郎)……………	(一四八)
將來の音楽に伴ふ三味線の譜と歌詞の改良……………	(田中正平)……………	(一六〇)
故豊澤團平師匠と私……………	(竹本伊達太夫)……………	(一七四)
氣の變る治兵衛とお客の頭腦……………	(竹本朝太夫)……………	(一九一)
澁いものと艶もの沼津引窓鮎屋……………	(竹本長廣)……………	(一九六)
將來の脚本は史劇が一番好い……………	(中村雁次郎)……………	(二〇四)
西洋樂を參考として尺八の音譜の改良したる丹精……………	(中尾都山)……………	(二一〇)
歌澤の稽古と歌澤振の苦心に就て……………	(歌澤芝金)……………	(二二一)
榎茂都派の歌振は斯此浦島を演ず……………	(榎茂都扇姓)……………	(二三九)
振事の研究と女優問題……………	(藤間勘右衛門)……………	(二四六)
上流社會に歡迎されたる新内の趣味……………	(富士松加賀太夫)……………	(二七六)
新舊の淨瑠璃と文樂座の興行に對する注文……………	(竹本攝津大椽)……………	(二八八)

○女義太夫發展策としての 研究所問題

豊竹 呂昇

△私は、技藝さへ練磨して男に負けぬ程勉強
しましたら、ナアニ女は女だけの長所がある
てあらうと自信して居ります、一生涯の間に
文樂座のやうな噴れの舞臺で男女合同の興
行に出勤がして見たいと思つて居り升、それ
も女太夫全體が今日のやうな考へては一人
て幾ら氣を揉んでも、また何程技藝を磨いて

も、世の中が女太夫と云ふものを排斥して眼
中に置いて居ませぬから、これは云ふだけ行
はれぬ事で、何でも女太夫一同がこの氣にな
つて呉れて第一は藝を勵み、第二は品行を正
しくせねばなりませぬと思ひ升、それで男女
合併と云つた處で、男の太夫と肩を並べて彼
人が三段目の切を語るのだから、妾は四段目
の切を語らねばならぬ、イヤ何か十八番のも
のを附ものとして語らせて貰ひ度など、云
ふ様なそんな望みは最初から持つては居り

ませぬ、せめて劇場の方で女形は女の方が能く適ると云つた様な譯で、たとへば忠臣藏の茶屋場の掛合などのとき、あかるを語るとか阿古屋を語るとか、斯ういふ鹽梅に女を使つて貰つたなら後には女で一段を受持つ事が出来るやうになるであらうと思ひます。

△この淨瑠璃を語りますのに、殊に女太夫の方には自分の語つて居る璃曲……例へば中将姫の雪責とか、王藻前三段目とかで、その五行本に現れてます文句に就て、その一段に出

て居る人物、岩根御前でも、また金勝治でも、その性格を知つて語るものは、ありませうが全體の脚色を知つて語ると云ふものは、マア皆無と云つても宜いくらゐです、尤も假名手本忠臣藏などは誰も知つて居ますが、モウ伊賀越となると、丸本も乗掛合羽と、道中双六との二様になつて居りまして通してやるときにはこの二様を合して演つて居りますから多少語り場に依つてすぢの通らぬやうな處もあります、こんな事はその丸本に就てよく

研究をして置く必要があらうと存じます、それ
に近年役者衆の方では俳優學校を設立す
るとか云ふ事もありますが、そんな仰山な事
は到底出来も致しますまいが、せめては一週
一度とか何とか日を定め、然るべき家に女太
夫の有志が集りまして、こゝを研究場として
然るべき人を頼み、院本の講義をして頂いて
其語る處の人物の性格また歴史、たとへばこ
の辨慶と云ふものは斯うであるが、作者が斯
ういふ風にこしらへて書たものだ、併し事實

は斯うしてあるが、其心をして語らなくッて
はいけないとか、また實際この人物は斯うで
はあるが、そこは狂言綺語だらう態と斯う語
るが宜いとか、教へて貰つたり、また此方から
も解らぬ事は質問すると云つた様にしたら
宜からうと思ひます、學校とまでは行かなく
とも、何とかして此事は實行したいと思つて
居ります。

△私が大阪へ参つたのは明治二十五年でム
います、其頃は大阪の女義太夫といふものは

大變世間から攘斥せられて居りまして、席は南に清津橋の播重、辨天座の西に金城ノ亭、天満の南歌久こゝらが屈指の席で、女義太夫がそれゝ出演しましたので、併し女義太夫が何分下品で又御客も下層の方々許りて、随分腐敗したものでムいしました、これは私の丁度上阪した時、此有様なので、その以前は中々立派なものだつたさうです、私も修業の爲めと思つて來て見て意外なのに驚きました、その上だんく、と内幕へ入ると益々汚い處

が目につきます、位、夫が今日では御客も中流のお方が見えます、し、中には上流の方々の顔も席で見受ける事もムい升、又ある一部分の席を除いては手拍子だとかいふやうな下等な騒ぎをやる、お客は殆どなくなりました、私は永く松の亭に居りますし、外の一座へは加らず、私の一座計りてやつて居りますから、他の座の事はあまり精しく存じません、語り口も文樂座と堀江座と少し宛變つた處があるやうに女義太夫の方でもこの座によつて少

し宛^{づつ}變^{かへ}つて居^をります、以前^{いぜん}は女義^を太夫^な風^{ふう}と云^いつて撥^ひ斥^{せき}されました、が、語^{かた}る淨瑠璃^{じやうるり}にはかはりはないのです、が、ツマリ不^ふ熱^{ねつ}心^{しん}でだんく
と語^{かた}り崩^くして仕舞^{しま}ひ、その崩^くれた淨瑠璃^{じやうるり}を又^{また}其^{その}弟子^{でし}から弟子^{でし}にと教^{おし}へて、遂^つには本筋^{ほんすぢ}と遠^はい妙^{めう}なものになつたのです。

△私^{わたくし}の參^{まゐ}つた時分^{じぶん}は、女義^を太夫^なといふ者^{もの}はあま
り劇^{はく}しい修^{しゆ}行^{ぎやう}はしなかつたのです、然^{しか}し只^{ただ}今^{いま}
ては舊^{もと}へ回^{くわい}復^{ふく}し修^{しゆ}行^{ぎやう}も勵^{はげ}み、男^お太夫^{たふ}さん、の宅^{うち}
二三軒^{けん}へは必^{かならず}ず稽古^{きこ}に廻^{まわ}ると云^いふやうにな

りましたから、勢^{いきほ}ひ客種^{きやくしゆ}も好^よくなつたのです
これは東京^{とうきやう}にもムいませう、大坂^{おさか}のわれ／＼
仲間^{なかつ}には因社^{いんしゃ}といふ組^{ぐみ}合^あがあるので、後^{うしろ}見^{けん}
古^こ老^{らう}、中^{ちゆう}老^{らう}といふ階級^{かいきふ}がムいまして、此^{この}中^{ちゆう}に名^な
が載^のつてゐぬ人^{ひと}には平人^{ひやうじん}と唱^なへて居^をります
仲間^{なかつ}では此^{この}中^{ちゆう}へ名^なか載^のるのを役付^{やくづき}したと申^{まう}
し、升^{しやう}平^{へい}人^{びやうじん}が中^{ちゆう}老^{らう}になるのには年^{ねん}限^{げん}がありま
して、七^{しち}ケ年^{ねん}勤^{べん}めると、中^{ちゆう}老^{らう}になりません、古^こ老^{らう}
になるには從^{これ}來^きの古^こ老^{らう}の中^{ちゆう}の人^{ひと}が缺^かけると
補^ほ缺^{けつ}に中^{ちゆう}老^{らう}から引^ひ上^あげるのです、因社^{いんしゃ}は年^{ねん}に

一度、十二月に備一亭で總會を催します私て
すか、私は古老株で長廣さんの次でございま
す。

△私は呂太夫さんの弟子です、然し呂太夫さ
んは太い聲、私は女の事ですからとてもあの
やうな調子は出ませぬし、かたゝ撮津さん
の型を見習はうと心懸けて居るのです、師匠
と稽古とは前です、師匠は呂太夫さんですが
稽古——別に口移しに習つたことは無いま
せぬが、稽古は撮津さんにしたので、文樂座

へは暇さへあれば毎日、もし忙しければ一興
行中に五六度も参りまして、撮津さんのお語
りなさるのを一心に聴いて本に朱を入れて、
自分で稽古を致します、私は稽古道樂と云は
れます位に、あちらこちらの男太夫さんの處
へ参つては稽古も致しますた事が、ムい升、私
は別に私の工夫などは無いません、只本筋通
りに語らうと心懸て居り升、松の亭へは一昨
年から出ました、始めは播重に五年、そこから
北の新地の萬亭に暫く、こゝが火災の後にはあ

ちここに居りましたのです、東京へは三十二年の時に四ヶ月も居りました、昇之助昇菊は私の弟子で、私がうつぼ館に出ました頃弟子にしたのです。

△私の得意の語り物と申して別に無いません自分がやりたいものがあつても、お客が受けなさらんければ致方がないので、只どんなにも受けのよい酒屋、太十、壺坂、堀川、仙臺、萩御殿などを語つて居る譯で、ムい升、人は妙なもので、自分があまりやらぬものが、却つて語

つて見たいと云ふ氣になるものです、私は折には西風のさびた方をやりたいと思ふことが、ムい升、もと女義太夫は彈語りのものであつたのです、女義太夫はこれが特色で、大阪ではあまり三絃ひきを用ゐなかつたのです、それにいつの程からか大阪も二人高座へ現れるやうになり、今では大抵皆三絃彈と二人で勤めます、これは多分東京の方から入つて來たのです、技よりは愛嬌の方で客を呼ぶ太夫達は、彈語が未熟ですから、やむを得ず三絃に

年功な人を頼んで其人に彈て貰つてお茶を濁すのです、その惡風に大阪迄感化されたのは歎かはいしい事で、私共の一座は前から決して三絃彈を用ひません、皆彈語をさせます、長廣さんも彈語りです、一人でやる譯には参りませからいつも未虎さんなどに話して居り升、早晚早非斯ういふ會を設立したいものと思つて居ります。



○浪花節の改良と私の希望

桃中軒雲右衛門

△私が持論として持つて居るのは浪花節の改良といふ事で一體浪花節といへて、大變卑俗なもの様に思召すがイヤ目下の状態を見ると奈何にも高尚なものとは思へないですが「其聴衆を感化するといふ點に至ては随分勢力を持つて居るものですから是れは改良して一の娛樂的敎育法としたなら好結果を得るだらうといふ考へを持つて居るのですが、そ

と反問を受けた場合には其答へに困る様な事があつては、何にもなりませんから先づ演者の頭から改めたいものです。是は容易な業ではありませんから私も死ぬ迄は其心得て骨を折つて見る考へですが奈何も一般の同業者に只お客さへ来ればよいといふ主義の人が多いため、奈何も思ふ様にならんものです。



○故園平の手紙を見て如何に 自分の非を悟つたか

豊澤園平

△私は九歳の年に、今度二代目豊竹呂太夫になりました、アノ祖太夫の父鶴澤重造の……へイ先代の重造です、其人の弟子になつて三味線を習ひかけました、重造といふ人は芝居へは出ず、宅で稽古ばかりをして居られましたので、私は芝居へ出たくて堪りません、そこで重造にその事を申しますと、そんなら園平

の弟子にして造らうと重造の手紙を持つて
團平さんの所へ弟子入を致しました、夫れか
ら、十八歳のときに疊屋町の清六、先代鶴澤清
六さんの養子になりました、處が一年餘りも
経ますと、直接には聞きませぬが團平の話し
に九市は清六方へ養子に往つてから、大分技
藝が下つたと云ふ噂をして居られたとの事
が私の耳に入りました、それで私は新左衛門
さんにその事情を語り何卒暇を取つて下さ
いと頼みましたので、新左衛門は私を迎に來

て呉れまして、養家を出しました限り歸りませ
んのて遂に離縁となりました。

△明治十三年に豐澤源吉と改各しまして、大
江橋の芝居(今はなし)へ出勤いたしました、そ
の時は春子太夫の阿波鳴戸順禮歌の段を彈
きました、同年に東京へ参りましたが、一座の
眞打は綱なんて春子は二枚目でゝいました
へい、一二年間東京に居たのです、其後春子と
長崎で興行中少しの事の衝突から別れる事
になりました、其後十七年に難波神社内に彦

六座といふのが出來ますに就て、私は組太夫を弾いて出勤しました、一年間程経ちますと肋膜炎に罹りまして三年ばかりも休業して居りました、その後朝太夫を弾きまして、東京へ参りました、丁度二年許りでせう、彦六座も没落の後歸阪しまして私は神戸の方へ往つて且那衆の稽古をして居りますと、アノ花里と云ふ人が彦六座の跡を買つて稻荷座と云ふのを設けますに就いて、出勤を促されましたけれども其時は師匠故園平に大隅を譲つ

てしまひましたので、私は新靱を弾いたり、或ときは生島を弾いて出勤して居りました、が兎角病身で休み勝てゐました、三十三年に仙左衛門と改名して、其時にはまた大隅太夫を弾き、堀江の明樂座へ出勤しましたが僅な感情の衝突から又もや大隅と別れ、私は東京へ参り、箱崎に家を持ちまして、株式や其他の且那衆に稽古をして居りました、それから堀江座でアノ「櫻時雨」を興行のとき歸阪して節附を致しましたが、其後忠臣蔵を出しまして、へ

イ彼の文樂座と競争の時に同座へ出勤して
また大岡太夫を弾く事になり、其後團平の
名を襲ふに付いて先輩とも種々交渉の末東
京の明治座へ一座と共に乗り込みますので
私は團平と改名の披露を致しました。

△私が神戸に居りました頃、師匠は長崎で興
行中に流行感冒に罹られましたして、誰一人看病
をする者が無いとの事を聞きまして、夫れは
大變だと私は取るものも取敢ず十二月の廿
七日に長崎へ参りました、處が興行は廿日間

かの約束で、僅か七日間働いて、師匠は病氣に
なつたのですから、仕打の損害も甚だしいも
のでした、が、私は師匠の給金を立て連て歸ら
うと思ひました處が、種々相談の結果私が師
匠の代りに十三日の残りの日を勤める事に
なり、師匠は漸く歸阪する事になりました、私
は翌年の一月早々から師匠の代りに出勤す
る事になりました、團平と源吉は銀と鉛より
もまだ、相違がムいますから、實は如何で
あらうかと心配を致しますたが、お庇蔭で其

興行が大當り、仕打の懷中の埋合せも充分に
 附きましたので、私も斯んな嬉しい事はない
 と存じて居ますと、歸途に熊本で興行する事
 になりました、其處で私は師匠の許へ照會を
 致し、其の許しを得て、熊本へ参りましたが、此
 興行も廿八日間大入續き私もこれは全く師
 匠のお庇蔭だと存じましたから、何卒喜んで
 下さい、貴師の代りを勤め、大當りですと云ふ
 意味の郵書を大阪の團平の許に送りました
 處が千賀子さん(團平の妻)が如何誤解せられ

たものか大立腹、師匠も共に腹を立て、アノ源
 吉は乃公を侮蔑にすると思はれたのか、更に
 返事もムいましてした。

△そんな事とは少しも心附かぬ私は歸阪し
 て見ると師匠は彦六座に出勤をして、朝太夫
 の阿古屋の掛合の三味線を弾いて居られま
 す、私は前の手紙で立腹の事は分らず、病氣の
 爲めに無理に長崎から戻つて来て、其仕打の
 方へ一應の挨拶もなく彦六座への出勤はチ
 ト不都合ではありませんか、と、忠告をしまし

た處が貴様のやうな恩知らずに言葉交す
必要はない、今から破門をすると云ふ恐ろし
い權幕、私もまだ年は若し、賣言葉に買言葉、ナ
ニ構ふものか、破門承知と疊を蹴立て清水町
の師宅を飛出し、モウ生涯團平の家には足踏
みはせまいと決心して神戸へ参りました、神
戸で相變らず且那衆に稽古をして居ります
と其後二年程も経ちますと、團平の許から助
三郎と云ふ弟子の三味線弾きに通の書狀
を言傳けて寄越されました、その文面は

綿蠻たる黄鳥、丘隅に止まる人として止ま
るを知らざれば鳥にだも如かざらんや、親
を持ち師を持ち、妻子を打ち行年を持ち、何
を以て身を立つるや、返答聞きたし。
之れだけの事が書てあつて、他には何事も書
ては無いませんでした、其書狀を見て私は自
分の非を悟りました、親を持ち師を持ち、成程
と思ふと、師の恩の尊び事が全身に染み渡る
やうでさしもの私もアゝ惡かつたと思ひま
して、早速師匠に謝罪をして、再び師弟の交際

をする事になりました、其恩師の名を繼ぎま
したる今日となると、紀念とも云ふべき書狀
を表装して掛物に致し度と存じますが、實は
其時にもコリヤ大切にせねばならぬと存じ
て時計の空函の中へ大切に收つて置いたの
ですが、いつの間に紛失させましたか如何搜
しても知れないので、之れのみ遺憾に堪へな
いのでムいます。



○和洋樂の調和と一中節の譜

大槻如電

△いろんな人が来るよ、堅いのも軟けエもの
も来るね、面白いわ、ハハハ、フム踊の話
か踊だつたら俺が踊つて見せるウハハハ、
ハ、イヤ正真だよ……踊の派流は十五六あ
りませう、西川、松賀、菊川、巴、一山、阪東、中村、英古
い所で志賀山、それから市川、これはお鳴とい
つたので、それで十かな、マ記臆にあるのはそ
んなものです、今は藤間に花柳が全盛で十中

○故豊澤團平師匠と私

竹本伊達太夫

174

△いつぞや稻荷座で妹背山を出した事があ
ります、其時三段目の掛合は、大判事を故彌太
夫、久我の助を住太夫、その三味線が龍助で、定
香を大隅太夫、雛鳥を伊達が勤め、この方の三
味線が故人の團平師匠、處が團平は雛鳥の節
附を全然變ました、伊達の咽喉には適はない
中ギンで語らせられました、實に意地の悪い
節で如何しても語りこなす事が出来ません

175

それで其時には伊達もモウ太夫を廢めて了
はうかと決心して、團平師匠にぶつかつて一
體師匠彼の節は何と云ふのですと尋ねると
團平は「上總と云ふ節から變化したものだ」と
答へた、その上總と云ふのを日本國中に知つ
て居る太夫がありますか、夫れはあるまい、其
無いものを教へて私を苦しめなさるのです
か、「油斷大敵ぢや、知らぬ、あるまいと思つても
何處に如何いふ人が聴いて居るかも知れぬ
アノ團平は上總の節を彼處に用ゐたと云つ

て賞めてくれる人が無いとも云はれぬ、和郎は今が勉強盛りぢや、覚えて置けば損にはならぬと云つて厳しく云はれました。

△それから私は大隅太夫の所へ往つて、何故清水町の師匠(故團平の事)は私を苦しめるのでせうと、私は愚痴をこぼしました、スルと大隅さんが「和郎は雛鳥ばかりでそんな事を云ふが、マア乃公の事を思つて見なさい、乃公は年が年中アノ師匠にいちめられて居るのだ」と云ひました、成程こゝが修業ぢやと思つて一

所の節を七日間餘りもかゝつて覚えましたが、團平師匠は又斯ういふ事を云ひました、和郎が今度雛鳥を語るに就て思ひ出したが、まだ春太夫(大隅の師匠)が存命中この妹背山の雛鳥を語つた事がある、其時にフト病氣に罹つたので、代役を越路太夫(今の攝津大塚)が勤めたが、其時の雛鳥は恰で下女としか思はれなかつた……私はその話を聞いて師匠越路さんが代りを勤めた雛鳥が下女であれは、今度私の勤める雛鳥は、貴郎は何と思つてお在

てすと、切込んで尋ねました、其時團平師匠は
 マア下女より下だと云ひました、私も憤として
 師匠、下女より下は何でござると、尋ねたの
 で、さしもの師匠も苦笑して答へませなんだ
 が、併し今日となつて見ると團平の言葉は一
 々教訓となつて、何程利益になつたか知れな
 いと實に有難く思つて居升。

△恐らく誰が中將姫の雪責を語つても、アノ
 姫の出の「ア、アいたはしの中將姫……」の處
 の三味線は、三下りに極つて居ます、何となく

その三味線の音で雪が降積るかの様に思は
 れる處で、その極つた節を攝津大椽のは二上
 りで、語ります、それは團平が節附をしたので
 その又二上りの節が何とも云へません、實に
 團平と云ふ人は節附の名人で、三下りを二上
 りに變て、サモ哀れに聞かせるのは非凡の力
 があつたからです、中將姫ばかりではありま
 せん、總て在來の節を變て、面白く聞かせるの
 が團平の得意とする所でした、此等の結果、東
 京の野澤語助さんなどは團平は義太夫の作

法を亂す男だと罵倒して居ますさうですが
團平は常に斯ういふ事を云つて居ました「モ
ウ博勞町(故春太夫)が歿したたら斯道の革命時
代と思はねばならぬ、到底今日の様に春、湊、染、
咲など云ふ太夫の歴々が、一場の芝居へ出勤
するやうな全盛な事は此度なからうと思ふ
だからこの革命の時代に私は成べく陳腐の
節を改めるつもりだと云つて熱心に節の改
良に苦心をしました、其の結果が今の大隅の
語り物に遣つてます、實に團平は斯道の神と

云つても宜いので、イヤ昔の誰は布引の瀧の
音と自分の弾く三味線の音色と競べたとか
長門太夫は大井川の洪水の際、その激流の音
と自分の聲を競べた事があるなど、云ふ話
しは残つて居ますが、團平の三味線と來たら
何に比べて宜いかと思ふ位です、今日になつ
て益々感心をして居ります。
△アノお染久松の野崎村の中に、久松は久作
の肩を揉み、お光は足に灸を點て居ながら、お
染の事から口論を始め、そんなら聞くぞやオ

、云ふぞやと我を忘れていさかひを」と語る處で、その「我」の處を三の糸でテンと受けるのが極つた節です、此テンと受けるので、語る方は「われ、」をわすれて」と引張つて語る事になつて居ますが、能く考へて見ると、こゝはそんなに緩くり語られては、人形の方に間が抜けます、其處を思ふて團平は、テンと二の糸で受ける事に改めました、テンと受けられると「われを忘れて」とカブツて語られるから、随つて人形も活動して、如何にも二人が争ふて居

るやうに聞えます、少しの事だがこゝらが工夫と云ふのでありませう、或時此野崎村を大隅太夫が勤めて、端場を私が勤めた事があります、スルと中日から大隅さんが病氣の爲めそこで全然團平の節附をした野崎村を覚え込んで、後に東京へ参りました時、豫て御愛顧を蒙むつて居ました芝高輪の後藤伯を訪問いたしました、其時はまだ伯も在世の頃で、折角來たのだから、一段語つて聞かせるとの御注文を受けました、そこで野崎村を語る事に

なりました。

△其時に故菊五郎も伯の御機嫌伺に来て居まして私の野崎村を一段聞き終り、さて後に音羽屋さんは私に向ひ、今ア「我を忘れて」の處をツンと受けさせて語つたのは始めて聞いた、成程彼れて無くツちやアならね、彼れは君の工夫か、また誰の型だと、流石に凝性だけあつて質問しました、そこで私は團平が工夫をした事を話すと、音羽屋さんも感心してこれから演劇で野崎を演るときには彼處は

ッンで語らせやうと云つて居ました、それから大隅さんの話る合邦の端場は他の太夫の語る在來のものとは違つて、故團平の妻千賀子が團平の注文で書直し、それに團平が節附をしたものですから、余程面白いものになりました、また恨鮫鞘の鱈谷の端場も新に書いて團平が節を附けました、この二ツとも私が書下しを語りました、併し文樂で攝津大椽が合邦を語る時は在來の端場を用ゐて居ますけれども、古手屋となると文樂座で演つても

私の處へ本を借りに参ります、私は團平の紀念だと存じて、今にもこの端場を大切に思つて居ります。

△大隅太夫が團平と東京へ往つた時に、東京は寄席を掛け持しなればならず、それゆゑ悪くすると聲を痛めます、夫れに團平はいつも五本以上の調子で語らせるので、大隅太夫は閉口して居ました、がどうか少し調子を下げ、呉れとも云ひ兼ねて居ますと、その容子を芽場町の宮松の亭主が察して團平に怨願

しました、どうか師匠モウ少し三味線の調子を低くしてお上げなさい、和郎さんは弾く方だから何とも無からうが、語る太夫の聲が堪らないぢやありませんかと忠告をした處が、イヤ五本よりは下げられぬ強てと仰しや、るなら私は給金を戻すから、先へ歸らせて下さい、と云つて頑として應じなかつたのです、私はこの時に大隅さんを氣の毒に思つて、只管低い調子の事を頼んで見ました處が、イヤ和郎の知つた事では無い、今此調子で語らせ

るのは彼の太夫の爲めを思ふからだ、誰れて
 もこの東京へ來たら歸阪に土産を提げて歸
 ると云ふ意味ではない技藝を下げて戻ると
 云ふ事を云つたものだ、團平も大隅を江戸三
 界へ連れて往つてソレ土産をさげて戻らせ
 たと云はれてはならぬ、マア黙つて聞いて居
 よ、此効果はキット大阪へ歸つてから現れる
 と云ひました成程その通り大隅太夫は歸阪
 すると直ぐ稻荷の産六座へ出勤しました、其
 時は前に故柳適太夫の先代萩朝太夫の中將

姫源太夫の御所櫻の三、大隅太夫は掛合の重
 忠河古屋の琴責と帶屋を語りました(此時は
 文樂座で今の大椽が先代萩朝太夫の興行朝
 太夫も源太夫も東京の寄席と格合の違つた
 劇場へ出たのだ忽ち二人とも聲を潰て了つ
 たのですが大隅太夫は矢張り五本の調子で
 少しも聲を痛めなかつたのです、其時に團平
 は私に向ひ、如何ぢや、私の云つた事に間違は
 無からう、彼の時に調子を下げて語らせたら
 後には三分が二分半位の聲になつてしまふ

のぢやと、成程感心してしまひました、私が
 平に苦しめられた稽古が實に今日に至つて
 非常な藥で益々團平のゑらひ人であるのが
 わかります、他人は彼方を世事に疎ひとか何
 とか云ひましたが、決して然うではありませ
 ん、故と何にも知らぬ顔をして居て、其實は腹
 に知惠のあつたお人でした



○氣の變る治兵衛とお客の頭腦

竹本朝太夫

△何しろ氣の變る治兵衛には困りますね、我
 々黒人でも治兵衛は難物として居ます、彼奴
 がお茶屋から歸つて來て、其のまゝ寐てる處
 をおさんが叩き起す、マア此の所はいゝとし
 て少しく奥になつてから小春の心中を、おさ
 んの口説きで初めて知つて氣が變るのです
 が此れが一度目、未だ其の奥のあの手紙です
 ねあれを讀んで亦氣が變る、通じて二度も氣

が變るから難物ですよ、小春とおさんですか
 あれは勿論堅氣な女房と遊女ですから、違つ
 てるのは云ふ迄もない筈ですが、其心持ちで
 語つて居ますがね、同じやうに聞えますツて
 さうでせうか知ら……半兵衛と宗岸もさう
 云ふ風です、ね、何しろ前のおさん小春のやう
 に此れも同じやうな老人、只半兵衛の方は時
 代で語りますね、宗岸は唯の親父と云つた違
 ひだけです、から此も亦随分むづかしい譯で
 す。

△呂太夫の語振は一寸威心なものです、何と
 云つてもあの聲でせう、あれだもの勿論地の
 節は出来ない、出来ないのて苦心した結果が
 臺詞へ持つて來たので、實際呂太夫の臺詞は
 いゝてすね、人に依つて太夫に依つて、種々の
 差があり、又種々の特長がありますね、節のい
 ゝ人もあれば、臺詞のいゝ人もあります、呂太
 夫は後者の方でせう、張り切つた氣がなくち
 や駄目です、此れあるが爲めに名人の義太夫
 は面白いので、此れは義太夫のみではなく、浪

花節でも講釋でも皆さうてすね、だが此の張り切つた氣と云ふ奴が何うかするとぬけて終ふ事があります、まあ一寸云つて見ると、お客が悲しい場合でもしんめりとせず、面白さうに騒ぐとか何とかすると、急に其の氣が何處へやら行つて終ふ、所謂氣ぬけてすね……。

△一人の眞面目な客の方が、百人の浮氣客より便りになりますね、氣ぬけの時偶然にも一人の眞面目な客があれば、其の一人に聽いてもらう積りで語りますね、其の内に又例の氣

が満ちて來ると云つた風です、天候と義太夫の關係は妙です、何でも曇天は悪い、第一お客の頭が變だから自然に太夫も氣乗りがせぬ譯で普通の時でも受けるのは、三枚目位のものであつて、客の頭が疲れちや駄目でござい

ますね……。



○澁いものと艶もの、沼津、引窓、鮮屋、

竹本長廣

196

△浄瑠璃を習ひ始めたのは漸う九歳のとき
 て親爺は下手の横好きとやらで、お飯よりも
 浄瑠璃が好きでムいしました、夫れて妾にも
 瑠璃を習はせる事になつて、其頃岡山に勝三
 郎と云ふ師匠がござりました、へい野澤吉兵
 衛さん(定代)のお弟子で……まづ最初の間は
 千兩轆のサワリだの三勝半七酒屋のサワリ
 そんなもの計りを習つて居りました、子供

197

ながら少し語れるやうになりますと、サア親
 爺は大騒ぎ彼處、此處へ妾を連れて往つて語
 らせました尤もその頃は妾ばりではござい
 ません、同じ年頃の娘達で浄瑠璃を習つて居
 るものが澤山ございましたから、その娘達と
 競争になりました、斯うなると師匠も随分厳
 しく云ひますし、第一親爺が金太郎になつて
 徐々にお座敷へ出して語らせる事になりました
 た、そこで十五の年で、其時に竹本長尾太夫さ
 んの弟子になり、その師匠の一字を貰つて長

廣と改名いたしました、その改名の披露は唯今はモウ無くなりましたが日本橋北詰を東へ入つた所にございました澤野席と云ふのへ出勤して披露を致しました、師匠は澁いものばかりを妾に教へまして、決して艶物は語らせません、偶々三勝半七の酒屋などを語りますと、大層叱りました。

△稽古でムいますか、それは唯今東京に居られます、先代の野澤吉兵衛さんや勝鳳はんに教へて頂きました、楠の三、彦山七ツ目、布引の

三などを重に語つて居りましたが、席主の方では、前受けのよい、先代の御殿とか、酒屋を語つてくれと申します、稽古をしても師匠が厳ましかつたので、語る事が出来ません、して、併し師匠は問もなく、明治廿六年亡くなられましたので、其後は越路太夫さん、唯今の攝津さんの御弟子になりました、艶物も語る事になりました。

△それから廿九年に初めて東京へ参る事になりますと、大塚さんが、お前が東京へ往くな

ら、その土産に中將姫と酒屋を教へて遣らう
 と仰しやつて教へて頂きました、東京では御
 存じの通り睦連の薬師の宮松、新柳、東橋、若竹
 などて百二十日間出勤しました、妾のモ、タ
 レは越玉と申すので、妾の語り物の中で、千本
 櫻の鮎屋は二枚札でムいした、語りものです
 か、東京の方は如何しても、艶物がよろしいさ
 うで、席亭からは廿四孝だとか、吉田屋とか、柳
 などの注文が出るのでムいます、妾は重に言
 葉で聽かせるものが得手で、沼津などを語り

ますが、東京でもこの沼津は賞めて頂きまし
 た、若竹で妾が引窓を語らうと申しましたら
 そんなものは不可と云はれました、けれども
 折角宵觸れもしたものですから、妾は親方の
 意に背いて語りました處が親方もそれを聞
 いて、意外に感心をして下さつたものか、お師
 匠さん感心した、引窓はお前さんの賣物にな
 ります、コレや二枚札だと云つて大層賞め
 られました、其時は妾も嬉しうムいました。
 △得意のものですか、何が別に得意と云ふ事

もムいません、東京では、桃山御殿を能く語り
 ました、千本の鮎屋は吉兵衛さんに教へられ
 ましたもので、鮎屋はいつも二枚札でござい
 ました、斯ういふお話しがムいます、東京を打
 揚げて横濱へ往つて居りますと、東京の御最
 負から電話でお座敷を云つて来て下さいま
 した、お断りを申上げましたが是非にこの事
 てムいましたので……それが日曜日の事で
 或る料理屋の座敷で御注文の鮎屋を一段語
 りました、汗を拭く間もなく、直ぐ汽車で横濱

へ歸り、一服する間もなく、舞臺へ上つて語り
 ますのが、生憎にも太功記の十段目でムいま
 すから、イヤモウ實に苦しうムいました。
 △もし少しでも閑があれば、文樂へ往つて淨
 瑠璃を聴きます、是れがモウ何よりの樂しみ
 て、一興行の中に何度も往つて聴く事がムい
 ます。



○新舊の淨瑠璃と文樂座の

興行に對する注文

攝津大椽

288

△近頃は、大分耳が遠くなりまして、宅で弟子共に稽古してやるのは、そないでも、ムいせんが、文樂へ參つて、高い所へ上つて語つて居りますと、自分に耳が遠いために、淨瑠璃に巾が、ムいませぬ、先づ質店でも、お染なんかは、ズツと斯う、小さくなつて了つて、マア、久松の父親の久作で、お客さんが、エライ満足する様な

289

譯で、ムいます、最負のお方は、何か怪我のない内に、モウ一段と云ふ所で、引上るが、宜いと申されます、どうぞ、こゝぞ、此處まで來たので、ムいますから、モウ止めても、十分なので、ムいます、が、それが、慾で、又、弟子の方では、何しても、モウ一二年、私達の爲に、氣張つて、貰はにや、どうも、ならんと、こないに、申しますので、御最負の中に、は續いて、出ても、合間々々に、休んで、自分氣の、向ひた時、演つたらと、如此に、申される方も、あります、が、何も、この、義太夫だの、角力な

ぞは少し氣が緩んで稽古を惰けますと、
 下つて了ひます、始終聲を張上げて演つて
 置かんことには可ません、二日三日休みまし
 ては十日位聲が出ませぬ、十日も休まうもん
 なら全然音聲が新くなつて了ふので、何しろ
 不自由な職業です。

△御承知の通り淨瑠璃の作の意味と云ふも
 のが、先歴史から故事を引きましたり旁々致
 して居りまするし、元々謡曲の裏と云ふ様な
 もので和文が専ら遣つてありまするもので

すから、尤も此頃文士連が色々なものをお書
 になつて、斯う云うものは淨瑠璃になるまい
 かと云ふお話もムいしますが、何うもその漢語
 が多くて誠に節が附け難いのでムいます、そ
 んなこととて一向新規のものも出来ませぬ、何
 しろ皆極く因循な古風なことが重になつて
 居るものでムいますから……それは新規に
 書いて貰つたもので何か面白いものがあれ
 ばやつて見やうと云ふ考へはありますが……
 ……、文樂の先々代の人が大分文が書けまし

たので、この人がチヨイ／＼新作物をやりま
した、併し何しましてもこの淨瑠璃でも聴か
うと云ふお客さんは、矢張新規のものより古
いものゝ方をお好みになりますので……新規
のものは私ども一遍語つた限りになつて居
るものが大分ムいます、中には二度位語つた
ものもムいます、先々代の居つた時分には、菅
原の中へても菅公の配所とか時平の邸とか
新規に入れましたし、又悉皆新しいものでは、
日本竹取物語などをやつたこともムいます

が、それも一遍限りで後にはいたしませぬ。
△その他忠臣蔵や太閤記の名前を實名に直
して、演つたこともムいます、八陣でも院本で
は蒲生飛彈守政清、それが後には加藤正清、近
頃又それを加藤清正と換へてやつて居りま
する、ツイ此頃も地方から新しいものを書い
て参りまして、斯う云ふものは何うかと云は
れますので、實は着手して見たものもありま
するが、何も義太夫としては六ヶ敷い様に思
はれます、何しろ誠に何うも中途半端の時代

で、傳來の舊作で文樂でもマア多い時は、一年に七度或は六度位外題を代へますが耳新しいものは何うしても餘り人氣がムいませぬ、猶且舊作のものを出しませぬ、ことには……それに旅興行に出掛けまして西でも東でも、大抵先方から何々を演じて貰いたいといふ風で、其外題は大概同じことで、數は澤山ありまするが、十分お客さんの耳について、ア、これなら宜からうと云ふやうなものは、三十か五十しかムいませぬ、それをば一年に六度

と七度も繰返して、三年が四年となりまする内には、誠に何もそれが何卒して今の教育のある方の耳に入れて恥かしくないものが出來たらと、こないに思ふては居りますが、何しろ中途半端の時節でマア大勢の方が……何も營業といふ事が附隨て廻はるもんですから其處が實に難かしいので……△左様、文樂でムいますか、御道理で、只今では多く他國から見えまして、先、文樂と云ふてそれ／＼マア評判して見て下さる譯でムいま

すが、誠に只今の有様ではお恥かしい様な事で、殊に東京からお越しになつた方でも、文樂と云ふのはこんなものかと……、甚だ何うも……何分あれだけの場所て無理に取擴げましてあれでムいますから、先年來種々場所も探さないことはない、探しては居りまするが……、これも私共の考では何うぞア只今の所はこれでも宜からうが、世の中も追々斯う進んで來ますると、到底只今の儘では……、それにはこの一個人で持つて居ることは、何ういふ

ものでムいませう、もう少し何とかして廣くマア會社組織とでも云ひますか、何か適當な方法をせないことには、立行くまいと思ふて居ります、それに何分彼の地に建て居ります人が、種々多様な人で、その營業萬端の顧問旁に這入つて居る人が、元來一向藝と云ふことに氣のない素人でムいまして、斯う云ふ人がやつて居りますのでムいますから、尤も先々代の内儀と云ふのが残つて居りまして、それが只今隱居して居りまするが、さう云ふ人が

やつて居りますのでムいいますから一寸相談
 が仕悪い物が纏りませぬので、方々の旦那方
 からその話がありますが、何もハイ……、
 △その時間などでも、豫て旦那方から朝から
 そんなことをオウ／＼やつて居る時ではな
 いと云ふことを申されますが、只今の院本と
 云ふものを全部やりますると、一日かゝりま
 す、それを抜き差ししまして、これに二ツ三ツ
 外の外題を作り直してやりますと、丁度一
 日で五幕とか六幕になります、六幕になりま

すると、一幕二時間としても丁度十二時間か
 らると云ふ様なことで、近頃早く打出します
 るのは、他所から汽車の便を藉つて御越にな
 る方のため、又土地の方は三時とか四時と
 か遅く始めて、夜十時か十一時頃はねる事に
 したら何かと、こないに色々に云はれる方も
 ムいですが、そないな工合に仕やうと思ひま
 すと、外にどうしてもモウ一個所、弟子の養成
 所を作らねばなりません、何しろ仰山な弟子
 やら見習やらが居りますから、宅で何ぼ稽古

しましても、突然にア、云ふ所へ出す譯には
 行きませぬ、早くから彼所へ出して若い間か
 ら、ウン／＼聲を締上げぬ事には間に合ひま
 せん、そんなこんなで何うも改良がむづかし
 うムいます。

名家演藝ひかへ帳終

明治四十四年七月十五日印刷
 明治四十四年七月廿日發行

名家演藝ひかへ帳
 著作權所有

著者 熊谷爲蝶

發行者 西村寅次郎
東京市京橋區南傳馬町三丁目十番地

印刷者 遠藤銓吉
東京市京橋區八丁堀仲町十番地

發行所 東雲堂書店
東京市京橋區南傳馬町三丁目

(電話本局一六三九番
 掛電東京五六一四番)

定價 金五十錢
 送費 金四錢